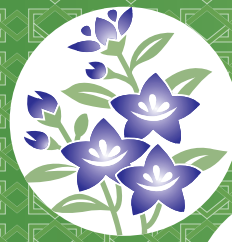


いろは



住所：台北市慶城街28号 通泰商業大樓
TEL：02-2713-8000 FAX：02-2713-0705
HP：http://www.koryu.or.jp/nihongo/（日本語センター）

25

2007年10月20日発行

発行：財団法人交流協会日本語センター 編集：佐藤貴仁・劉皓盈 印刷：加斌有限公司

2006年度「台湾における日本語教育事情調査」報告

（財）交流協会日本語専門家 上條純恵

当協会では、台湾における日本語教育事情を把握し、より効果的に日本語支援活動を展開していくために、これまで1994年度、1996年度、1999年度、2003年度と日本語教育機関を対象とする教育事情調査を継続的に行ってきた。2006年度には新たな試みとして、教育部（日本の文部科学省に相当）と合同で、機関、教師数、学習者数などの実数の把握を主な目的とした調査を行った。その結果の一部をここに報告する。

1. 概要

調査対象：（イ）中等教育機関（高等学校、職業高等学校）712機関
（ロ）高等教育機関（大学、放送大学）256機関
（ハ）学校教育以外の機関（語学学校、塾など）428機関

調査期間：2006年12月～2007年3月

調査方法：調査票の郵便・ファクス・Eメールでの送付、電話での聞き取り、訪問調査

調査項目：（イ）機関について
（ロ）機関の性格
（ハ）教師数
（ニ）学習者数
（ホ）日本語学習の目的（多岐選択式）
（ヘ）日本語教育上の問題点

調査票の回収率：（イ）中等教育機関 100%
（ロ）高等教育機関 100%
（ハ）学校教育以外 24.5%

2. 日本語教育の概況

2.1 機関数、教師数、学習者数

表1 教育段階別日本語教育機関数、教師数、学習者数

	機関数(機関)	教師数(人)	学習者数(人)
中等教育	252	667	58,198
高等教育	156	1,652	118,541
学校教育以外	105	472	14,628
合計	513	2,791	191,367

表1の各教育機関の機関数・人数と図1～3の構成比（%）から、高等教育機関の教師数の割合は59.2%、学習者数の比率が61.9%で、ともに全体に占める比率が高いことが判る。

中等教育機関は、機関数が全体の49.1%と約半数を占めているものの、教師数、学習者数の割合はそれぞれ23.9%、30.4%と少ない。1人の教師が担当する学習者数について見ると、中等教育機関が86.9人、高等教育機関が71.7人、学校教育以外の機関では26.9人となっている。前回調査と比べ、3つの機関それぞれで教師が担当する学習者数が増加している。

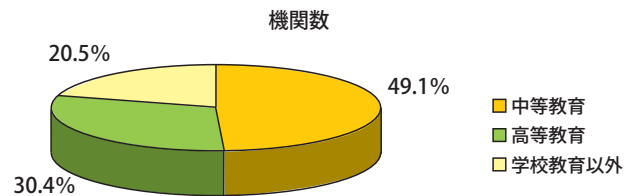


図1 教育段階別日本語教育機関数

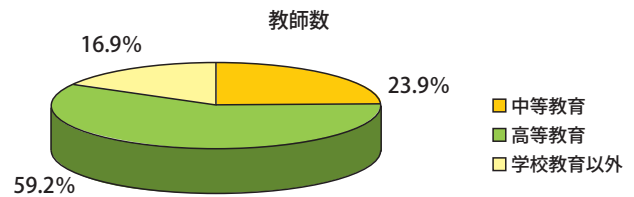


図2 教育段階別日本語教師数

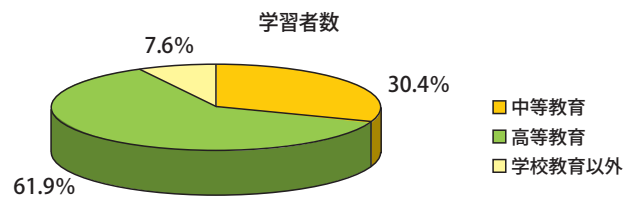


図3 教育段階別日本語学習者数

2.2 機関数、教師数、学習者数の推移

表2、図4～6は過去3回と今回の調査において判明した日本語教育を実施している機関数、教師数、学習者数の推移を表している。2003年度の調査結果と比較すると機関数、教師数、学習者数ともに増加している。特に学習者数は1999年度から2003年度にかけて機関数と共に大幅に減少したが、今回は1999年度の調査結果に近い数字にまで回復している。しかし、2003年度調査時の減少は調査方法の差異や調査票回収率の低下によるものが大きく、日本語能力試験受験者の数が1991年度の実施開始以来、増加の一途を辿っていることなどを考慮すると、実際には、その数は横ばいか緩やかな増加傾向にあったものと推測される。

表2 日本語教育機関・教師数・学習者数（括弧内数値は前回比）

	機関数(機関)	教師数(人)	学習者数(人)
1996年度	342	1,198	161,827
1999年度	694	1,742	192,645
2003年度	435	2,496	128,641
2006年度	513 (+17.9%)	2,791 (+11.8%)	191,367 (+48.8%)

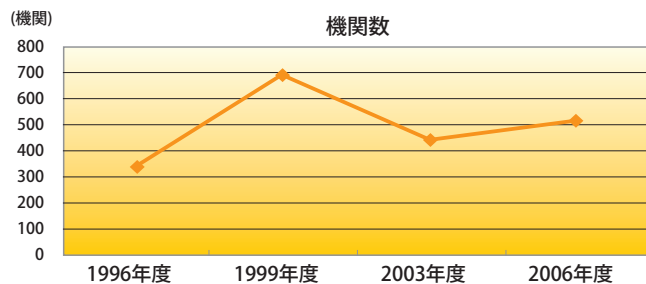


図4 機関数の推移

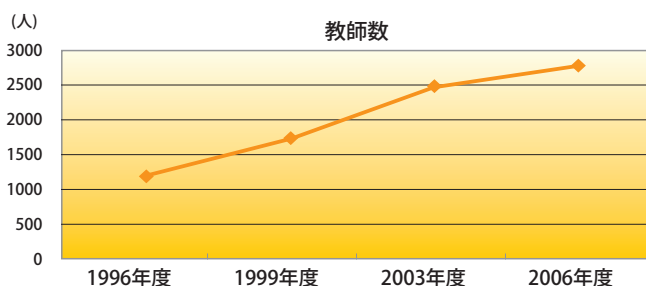


図5 教師数の推移

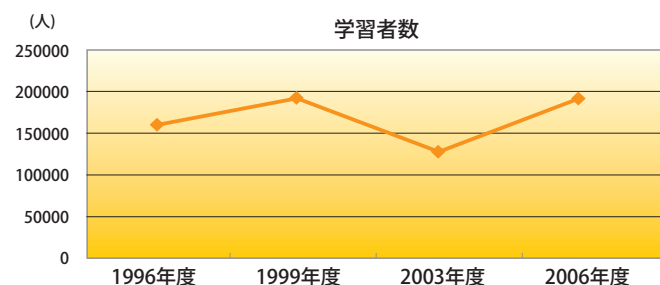


図6 学習者数の推移

3. 「日本語学習の目的」と「日本語教育上の問題」

3.1 日本語学習の目的

全体的な傾向としては「日本の文化に関する知識を得るため」、「日本語という言語そのものへの興味があるため」、「日本人とのコミュニケーションができるようになるため」が主要な学習目的になっているが、教育段階ごとに見ると、中等教育機関では「国際理解・異文化理解の一環として」のポイントが高く、高等教育機関では、「将来の就職のため」などの実利的な理由から、日本語を学ぶ学習者が多いことが判った。

3.2 日本語教育上の問題

「教師の数が不足している」、「学習者が日本語学習に熱心ではない」という問題は、中等教育機関、高等教育機関共通に見られるが、学校教育以外の機関では、これらの問題点の割合が比較的低くなっている。また、中等教育機関における他の教育機関には見られない特徴的な問題として、「日本語

教材・教授法に関する情報が不足している」「日本の文化や社会に関する情報が不足している」という項目が挙がっていることが判った。

4. まとめ

今回の調査では、前回2003年度調査と比べ、それぞれの教育段階で、日本語教育機関数、教師数、学習者数がいずれも増加したことが確認できた。

教育部はこの10年来、中等教育における第二外国語教育の振興を推し進めており、中でも日本語は最も高い人気を維持している。こうした状況が学習者増に反映されていることは当然の結果だと言えるだろう。さらに、教育部は中等教育機関を対象に「国際教育旅行」を奨励しており、それにより毎年多くの生徒が日本旅行を経験している。この体験をきっかけとして、生徒が進学先に日本語学科を選択することや大学の第二外国語として日本語を学習するケースも報告されている。このような背景が、高等教育機関での学習者増を後押ししている要因の一つと捉えることもできよう。また、高等教育においても、入学制度の改革により、大学が独自の入試方法を実施することが可能になり、推薦入試などで日本語力が評価の対象として認められるようになった。さらに、日本語学科や日本語関連科目を設置する大学・大学院の数は増え続けている。その教育形態として「主専攻」「第二外国語」などの相違があるにせよ、台湾全高等教育機関165機関のうち156機関(94.5%)で日本語教育が行われていることは注目すべきことである。

また、学校教育機関以外の学習者における「日本語学習の目的」として、「日本に観光旅行するため」という回答が全回答の中で比較的高い数値を示している。これは、中等・高等教育機関における学習者の「日本語学習の目的」の上位には現れていない回答である。この要因として、2005年9月から日本への観光ビザ取得が免除になったことによる旅行者の増加が考えられる。この措置の適用後、台湾から日本への入国者数は年々増加しており、2006年度には前年度比2.8%増の1,352,493人という人数を記録している。こうした背景から、観光目的で旅行会話等を学習するケースの増加が、調査結果に結びついていると考えられる。

上記のように、近年、台湾における日本語教育をめぐる状況は大きく変化してきた。また、日本語を取り巻く様々な現状を考えると、日本語学習者数は今後も増加していくと予想される。当協会ではこのことを念頭に置きながら、台湾における日本語教育の更なる支援を行っていきたいと考えている。また、今回の調査の更に詳しい内容や分析、日本語教育機関のリスト等については、過去の報告書とともに日本語センターのホームページに掲載してある。それらの情報が皆様のお役に立つことを切に願っている。

また、多忙にも関わらず、調査にご協力くださった多くの関係諸機関・諸氏に、この場を借りて厚く御礼申し上げる。

1 平成18年法務省調べ

URL : <http://www.moj.go.jp/PRESS/070518-1.pdf>

2 日本語センター

URL : http://www.koryu.or.jp/nihongo/ez3_contents.nsf/Top

「能動的学習を促す学習環境デザインと教材作成」

實平雅夫氏(神戸大学留学生センター准教授)

リチャード・ハリソン氏(神戸大学留学生センター准教授)

◆能動的学習

能動的学習とは、従来の伝統的な受動的学習に対して構築された学習の有り様です。知識注入型学習に対して共同学習・協同学習・参加型学習、先生中心主義に対して学習者中心主義、先生が学習者に知識を与えるのに対して学習者が積極的に学習過程に参加すること、そして、ノート・暗記・ドリル形式テストに対して問題解決・知識の分析と統合・知識の創造と評価によって創り上げられます。能動的学習は、それだけが単独であるのではなく、そのプロセスの中で他者との対話、対象との対話、自分自身との対話につながっていきます。

能動的学習が出てきた背景には、第二言語習得の研究があります。研究には、言語の習得過程そのものを扱う研究と学習者および言語習得に関わる諸要因を扱う研究がある中で、学習者に焦点をあてた研究の重要性が指摘されるようになりました。従来は個人差の研究として、統計を用いた量的研究が中心でしたが、近年は観察により詳しい記述を行うエスノグラフィーを用いた質的研究も増えていきます。

◆学習環境デザイン

第二言語習得の過程には多くの要因がかかっているとされていますが、大別すると、社会文化的要因・学習者要因・学習環境要因です。学習者や学習環境は社会文化的な状況・コンテキストの中にあり、その影響を受けるとともに学習者と学習環境も相互作用によって習得過程に影響を与えていると思われます。

社会文化的要因と学習者要因を変えることは困難ですが、学習環境は変えることができます。そうすることによって能動的学習を促すことができるのであり、学習環境を構築するためには、デザインモデルが必要になります。学習環境のデザインモデルとは、まず、先生自身のビリーフにもとづく理念があって、それを自分が現実に教えている教室の状況に当てはめて考え、教材を工夫して授業を実践し、その過程を評価して次の理想に至るプロセスです。すなわち、理想→現実→実践→評価、そして、次の理想…という循環を上向きのスパイラル(螺旋)状に繰り返していくことになります。

具体的には、フォーマルな学習環境としての教室に対してインフォーマルな学習環境として教室外があります。整備された学習の場に対して学習者が創る学習の場、複数の学習者に対して単独または複数の学習者、先生中心に対して学習者中心、リソースが限定されているのに対して豊富なことが特徴としてあげられます。

◆社会構成主義

理想を支える理論として取り上げた社会構成主義は、旧ソビエト連邦の心理学者であるレフ・ヴィゴツキーが唱えた理論を表すものですが、子どもの発達を心理学的に観察する中

で、生れたものです。発達は「できる」「できない」という1対0的な概念ではなく、徐々に「できない」から「できる」へ移行していくのであり、これを「発達の最接近領域」と呼びます。その上で、学習過程とは、学習者よりも能力が高い他者による援助、すなわち、アメリカの教育心理学者であるジェローム・ブルナーの言う「足場かけ(scaffolding)」によって「できない」学習者が「ひとりのできる」ようになることを意味します。

日本語教育との関係において、社会構成主義の学習論を構成する学びの要素には、①道具の道具、すなわち、言語を媒介として意味を構成する言語的実践としての学び、②問題解決過程における「反省的思考=探求」としての学び、③具体的な作業における「社会的コミュニケーション」としての学び、④自己と社会(アイデンティティとコミュニティ)を構成し続ける実践としての学び、の四つが含まれます。これを、アメリカの哲学者であるジョン・デューイは、「意味」は(中略)「行動の所産」であるとして、(中略)その「意味」を構成する言語の本質は、(中略)何らかの協同的活動における対人関係の「コミュニケーション」にある、としています。

◆教材作成

学習者一人ひとりを習得過程にかかわる要因とその相互作用からみていくと、それぞれ異なっていることが分かります。そこで、学習者をいろいろな方面からとらえることが必要になります。教室では学習動機が弱く消極的にみえる学習者も教室外では積極的に自分で日本の情報を集める存在としてみれば、ひとりの学習者として多角的にとらえる必要があります。

学習者が興味を示す素材を教材に取り入れる、日本社会について学習者一人ひとりが関心を持つ分野について調べてひとつの新聞としてまとめて発表する、食文化について日本と比べて母語で話し合うといった工夫によって、教室の日本語学習が日本の社会や文化への関心と結びつき、学習者の学ぶ姿勢も変わっていくでしょう。そして、学習者を観察することによって、明日の授業で用いる教材を工夫して準備できます。

参考文献

- 林さと子(2002)「日本語・日本語教育を研究する 第19回 第二言語習得研究 -学習者一人ひとりに注目する-」『日本語教育通信』第43号 国際交流基金 pp.6-7.
- 木村哲也(2006)「社会構成主義と日本語教育」『平成18年度日本語教育学会秋季大会予稿集』日本語教育学会 pp.195-200.
- 国立国語研究所編(2006)『日本語教育の新たな文脈—学習環境、接触場面、コミュニケーションの多様性—』アルク
- リチャード・ハリソン 實平雅夫(2005)「教育理念を具体化する Flexible Classroom(I) -日本語教育CALL環境の設計・導入-」『神戸大学留学生センター紀要』第11号 pp.55-73.
- リチャード・ハリソン 實平雅夫(2007)「教育理念を具体化する Flexible Classroom(II) -学習効果の評価に基づく日本語教育CALL環境の再設計と再評価-」『神戸大学留学生センター紀要』第13号 pp.21-33.

第1回日本語教育講演会

7月6日(土)文藻外語学院にて、第1回日本語教育講演会が行われた。楊承淑氏(輔仁大学翻訳学研究所教授)を講師に迎え、「通訳者・翻訳者への道—必要な技術とは?—」というテーマで講演会が行われた。

通訳・翻訳に関する講演会が高雄事務所主催で開催されたのは初めてであり、日本語教育関係者だけではなく、企業で働く通訳者・翻訳者まで含めた幅広い層から、多数の参加があった。

通訳・翻訳論の紹介から、通訳・翻訳技術の具体的な訓練法に至る実用的で専門性の高い講演は参加者から高い反響を呼び、「今後も、通訳・翻訳に関する講演会を行ってほしい」「シリーズで開催してほしい」との声が多く寄せられた。

2007年度台湾人日本語教師本邦研修

去る7月17日から8月4日まで、杏林大学八王子キャンパスにおいて、台湾の高等教育機関に所属する日本語教師10名を対象とした、日本語教育に関連する研修が行われた。この研修は、当協会が杏林大学に委託し、1998年から毎年実施しているもので、今回の研修がちょうど10年目にあたる。

参加者を対象とした研修後のアンケートでは、「認知語彙論が勉強になった」「日中翻訳研究の授業で通訳者に対しての積極的な育成方法と育成の態度を学んだ」といった、講義に関する具体的な感想のみならず、「時代の流れに従い、もっと新しい知識や概念を吸収しなければならないという実感を得た」「日本語教育の研究に関するこれからの方向性が窺えた。新たな変革を迎えた時代の新しい知識や技能を身につけるように頑張りたい」といった、講義全体を通して最新の日本語教育に触れ、教師として更に研鑽していきたいという旨の意見も数多く聞かれた。

また、研修に参加してよかったこととして、「研修だけではなく他大学の教師と交流することができたこと」「台湾人の日本語教師達とネットワーク作りができたこと」「他校の先生方と日本語教育について意見交換ができたこと」という意見が、複数寄せられた。これは本来の目的ではないが、本研修をきっかけとした日本語教師間のネットワークが形成されたことも、成果の一つと捉えることができるだろう。

最後に、研修を終えた感想として「ほんのちょっとだけだが、日本語教師として自信を身につけた」「日本語教師として一つ一つ壁を乗り越えることで、一回りも二回りも成長し、挫けずに頑張ってみよう」「一生日本語と付き合いっていく覚悟を決めた」という意見も寄せられ、参加者にとって大変意義深い経験となったようである。



研修参加者と講師の本田弘之氏(杏林大学)

台北事務所日本語センターからお知らせ

㊦いろいろの発行について

「いろいろ」をご愛読くださりまして、ありがとうございます。これまで9月、3月の年2回発行してまいりました「いろいろ」ですが、2007年度より発行日を10月と4月に変更いたします。また次号より、研修会の報告やイベント情報などは当協会ホームページに掲載し、最新の日本語教育事情など日本語専門家の取材を基にした記事等を皆様にお届けしていきたいと考えております。新しい「いろいろ」も、引き続きよろしくごお願い致します。

㊦ホームページのデザイン変更について

当協会のホームページデザイン一新に伴い、日本語センターホームページのデザインも変更いたしました。イベント情報及び、台湾における日本語関連の行事を掲載した「イベントカレンダー」や研修会の案内、報告などの他、巻頭で紹介した「日本語教育事情調査」の最新版をダウンロードすることができます。また「閲覧室」のページからは、新着図書情報や所蔵図書の検索も可能です。是非ご利用ください。

㊦日本語センター所属日本語専門家2名交代

現在、当協会には、台北事務所3名、高雄事務所2名の日本語専門家がおり、大学への出講、研修会の企画・運営など台湾における日本語学習者の一助となるべく、また台湾における日本語教育の情報発信基地を目指し、尽力しております。

今般、任期満了に伴い台北事務所の2名の専門家が交代し、2007年7月25日に虎尾憲史専門家、佐藤貴仁専門家が着任致しました。皆様との対話を大切にしながら、各教育機関のつながりを広げるために何ができるか、一丸となって取り組んでいくつもりです。

虎尾先生より一言

初めまして。これまで日本以外では、エジプト、インドネシアで教えてきました。先進国で漢字圏の台湾は初めてなので、日々勉強の毎日です。台湾における日本語教育の更なる向上のために何が必要かを皆様と共に考え、共に実践していければ幸いです。どうぞよろしくお願い致します。

佐藤先生より一言

台湾の日本語教育にとって、どのような支援が必要なのか、現在模索中です。現地の先生方と共に現場を肌で感じ、学習者とは学び合いながら、その答えを探っていきたく思っています。どこかで会ったら、気軽に声を掛けてください。これからどうぞよろしくお願い致します。

高雄事務所からお知らせ

10月27日と1月5日の研修会(次頁参照)会場は下記のとおりです。お間違いのないようお願い申し上げます。

高雄市五福三路21号9F 東南水泥大樓
義守大学推広中心



第22回日本語教育実践講座（高雄）

日 時：10月27日（土）13：30～16：30

テーマ：「考える力を伸ばす日本語教育」

講 師：関口要氏（南台科技大学／呉鳳技術学院講師）

会 場：義守大学推進教育センター

（高雄市五福三路21号9F 東南水泥大樓）

概 要：外国語の学習は文型や語彙をひたすら暗記し練習することに偏りがちです。確かに、文法知識や豊富な語彙の積み重ねが、外国語を上達させる要因の一つであることは確かです。しかし、それを考慮したとしても、台湾の日本語教育の場では、他教科・他学問の学習において高度な思考が要求されるのに比べ、「考える」機会が少ないように思います。この研修会では、普段の授業の中でいかに学習者に考える機会を与え、それを言語能力の向上につなげさせるかを講師とともに考えていきます。具体的には、動詞活用の導入方法、ミニディベートを通じた文型練習、スピーチ原稿の書き方などの紹介を予定しています。

2007年度 第5回日本語特別講演会（台北）

日 時：11月3日（土）14：00～17：00

テーマ：「日本語の標準化と簡約化」

会 場：交流協会日本語センター（3F）

講 師：田中章夫氏（東呉大学客員教授）

概 要：日本語の国際化が叫ばれて久しく、今や、世界中で日本語を学んでいる人の数は、二百万とも三百万ともいわれています。この国際化自体は、喜ばしいことに違いありません。しかし、日本語の側に国際化に耐える準備ができていないかという、これはどうも心許ないように思われます。

例えば、外国人の日本語には、よく「美しい国」や「その本は読んだです」といった、耳慣れない言い方が現れることがあります。このような日本語を誤りだと片づけてしまうのは簡単ですが、それなら、外国人が学ぶべき標準的な日本語が確立されているのかとなると、イエスと答えるのは躊躇せざるをえません。

日本語の急速な国際化は「外国人に学んでほしい標準日本語は、どうあるべきか」という新たな課題を突きつけています。日本語の国際化を求めるならば、日本語自体の標準化とその簡約化は避けて通れない問題です。

今回は、語法と表現上の問題を中心に、日本語の標準化と簡約化の方向を考えてみたいと思います。

第23回日本語教育実践講座（嘉義）

日 時：11月17日（土）11：00～16：30

テーマ：「初級レベルの学習者を対象とした教室活動」

講 師：小川京子氏（中華民国対外貿易発展協会日本語講師）

蔡錦雀氏（呉鳳技術学院応用日語系主任）

上條純恵日本語専門家（交流協会高雄事務所）

会 場：呉鳳技術学院（嘉義県民郷建国路一段117号）

申 込：呉鳳技術学院応用日語系

（TEL:05-2267-125 #61602 FAX:05-2067-240）

概 要：この研修会では、日本語学習者の初歩段階にどのよ

うに授業を設計することでアウトプットができるようになるかということを考えていこうと思います。説明中心の授業から話す活動を取り入れるためにどうしたらいいのか「文化初級日本語」の著者の一人である小川京子先生と研修会参加者がアイデアを出し合い共有します。また、嘉義県で唯一日本語学科を有する呉鳳技術学院日本語学科が行っている日本語の学習成果を高める取り組みを紹介します。

第24回日本語教育実践講座（高雄）

日 時：2008年1月5日（土）13：30～16：30

テーマ：「日本語教師に必要な知識とは？－日本語教育能力検定試験を通して－」

講 師：山崎恵氏（姫路獨協大学外国語学部日本語学科教授）

会 場：義守大学推進教育センター

（高雄市五福三路21号9F 東南水泥大樓）

概 要：日本語教育能力検定試験（以下、検定試験）は、日本語教師になるための資格の一つで、1987年度から年に一回実施されています。実施要綱によると、その目的は「日本語教員となるために学習している者、日本語教員として教育に携わっている者等を対象として、その知識および能力が日本語教育の専門家として必要とされる基礎的水準に達しているかどうかを検定すること」で、受験資格に特に制限はありませんが、試験が日本国内で実施されていることもあり、海外においては、この検定試験が研修会などのテーマとして取り上げられることは余りないようです。しかし、検定試験が日本語教師として一定レベルにあることの証明だと考えると、試験を通して教師に必要な知識とは何かを考えることは、海外の日本語関係者にとっても無駄なことではないと思います。

講義では、検定試験の出題範囲や傾向について、これまでの該当諸分野のどの内容が出題されているのかを紹介しながら、学習者の誤用分析等、現場でも知っておくべき知識を中心に概説します。その後で、ある文法的意味を説明するための適切な例文作りをワークショップ形式で行い、検定試験問題が現場でどのように活かされるのかということ、受講者の皆さんに体験していただきたいと思います。

第25回日本語教育実践講座（高雄）

日 時：2008年3月8日（土）13:30～16:30

テーマ：「教室活動を楽しくしよう」

講 師：大須賀孝明氏（文藻外語学院専任講師）

齋美智子氏（高雄第一科技大学助理教授）

中濱晴美日本語専門家（交流協会高雄事務所）

会 場：文藻外語学院（高雄市三民区民族一路900号）

概 要：皆さんは、教室活動の中でどんな工夫をしていますか。学習者に興味を持たせ、そしてその興味を持続させるためには、どんな活動が効果的なのでしょう。この研修会では、各講師が授業の中で工夫して行っている教室活動を紹介します。また、参加者の皆さんからも、上手くいった活動だけではなく、上手くいかなかった活動のお話しも伺い、どうすれば上手くいくのかをみんなで考える場にしたいと思います。皆さんで、楽しい教室活動のアイデアを共有しましょう。

2007年「全方位日本語應用」国際学術会議

日 時：10月26日（金）
 会 場：義守大学応用日本語学系（高雄県大樹郷学城路一段一號）
 問合せ：義守大学応用日本語学系（07-657-7711 #5552・5553）

2007年応用日本語教学研討会

日 時：10月27日（土）
 会 場：呉鳳技術学院応用日本語系
 （嘉義県民雄郷建国路一段117号）
 問合せ：呉鳳技術学院応用日本語系
 （05-226-7125 #61601・61602）

台湾日本語言文芸研究学会

2007年度日本言語文化研究国際学術研討会

日 時：11月17日（土）
 会 場：長栄大学応用日本語学系（台南県歸仁郷長栄路一段396号）
 問合せ：長栄大学応用日本語学系（06-278-5123 #4251）

第4回全国大学生日本語ディベート大会実行委員会主催 「一日弁論堂」

日 時：11月18日（日）10：00～17：00
 会 場：文藻外語学院
 人 数：約30名程度
 資 格：日本語学習者
 問合せ：交流協会高雄事務所文化室（07-771-4008／上條）

教育部・中央広播台・交流協会主催 文藻外語学院・銘伝大学共催

96学年度全国大学専科学校日本語スピーチコンテスト

◎予選（二地区で実施）
 南部予選：11月18日（日）文藻外語学院
 北部予選：11月25日（日）銘伝大学士林キャンパス

◎決勝

日 時：12月9日（日）
 日本語非専攻組 9:00～
 日本語専攻組 13:30～
 会 場：（財）中央広播台4F 国際庁
 問合せ：（財）中央広播台（02-2885-6168 #722）
 U R L：http://www.cbs.org.tw

2007年南台科技大学国際シンポジウム

テーマ：「次文化(subculture)與應用日本語教學」
 日 時：11月23日（金）・24日（土）
 会 場：南台科技大学国際会議室（台南県永康市南台街1号）
 問合せ：南台科技大学人文社会学院応用日本語系
 （06-253-3131 #6301）

第三屆跨文化研究中心研討会

テーマ：「東西飲食文化與禮儀」
 日 時：11月9日（金）9:00～17:00
 会 場：国立政治大学行政大樓七樓第二、第五會議室
 問合せ：国立政治大学外国語文學院（02-2938-7070）
 U R L：http://www.cfcs.nccu.edu.tw

2007国立高雄第一科技大学応用外語国際学術研討会

日 時：12月7日（金）
 テーマ：「超越『視』界 - 語言學習與使用新探索」
 -Transcending Borders: Innovations in Language Use and Learning-
 会 場：国立高雄第一科技大学国際會議庁
 問合せ：国立高雄第一科技大学応用英語系
 （07-601-1000 #5101）

銘伝大学応用日本語系・台湾日本語文芸学会・台湾日本語教育学会

2007年度日本語文・日本語教育国際学術シンポジウム

日 時：12月15日（土）
 会 場：銘伝大学士林キャンパス（台北市中山北路5段250号）
 問合せ：銘伝大学応用日本語系 国際学術研討会準備委員会
 （03-350-7001 #3222）

2007年日本研究跨学際国際学術研討会

日 時：12月28日（金）
 会 場：興国管理学院図資大樓7F（台南市安南区育英街89号）
 問合せ：興国管理学院応用日本語学系（06-287-0396）

2008国際学術研討会

応用日本語系專業日本語教育学術研討会

日 時：2008年3月14日（金）
 会 場：銘伝大学応用日本語系桃園キャンパス
 （桃園県龜山郷大同村德明路五1号）
 問合せ：銘伝大学応用日本語系（03-350-7001 #3222）

「第4回全国大学生日本語ディベート大会」関連情報

主 催：（財）交流協会・義守大学
 指導単位：教育部
 運営委託：ディベート大会実行委員会（委員は主催校代表者、競技ディベート及びディベート教育経験者等で構成され、ルール作成・論題作成・指導方法や審判養成等の研修会・大会運営等を担当。）
 日 時：2008年5月3日（土）・4日（日）
 ＊参加校数により、3日の1日開催となる場合もあり。
 主 催 校：義守大学（高雄県大樹郷学城路一段一號）

第4回大会論題

「台湾は外国人労働者の受け入れをとりやめるべきである」

大会に関する今後の予定及び関連研修会については、下記のホームページを参照のこと。

http://www.koryu.or.jp/nihongo/ez3_contents.nsf/04

いろは25号 目次

- 1～2 台湾日本語教育情報源
- 3 日本語・日本語教育のキーワード
- 4 日本語教育ニュース・事務所からのお知らせ
- 5 研修会のお知らせ
- 6 台湾日本語教育関連情報